

ヨシュア記24章1-2a、14-25節

エフェソの信徒への手紙5章21-33節

ヨハネによる福音書6章60-69節

先週は満月でしたが、それ以降少しづつ暑さが和らいできたように思えます。暑さのピークは過ぎたようです。朝夕、教会の庭に出ると心地よいです。

さて、本日の旧約日課は、ヨシュア記です。その中でも全体の終わりの部分です。指導者ヨシュアが、イスラエルの民に対して、主なる神様を信じ、それに従うかを問う個所です。ヨシュア記は、出エジプトの出来事の続きを描いていますが、指導者がモーセからヨシュアに引き継がれています。イスラエルの民は、約束の地、カナンの地に入り、新しい指導者ヨシュアから主なる神様を信じるかどうかを、改めて問いかけられるのです。

24章24節には「民はヨシュアに向かって、『私たちは私たちの神、主に仕え、その声に従います』と言った」とあります。しかし、これ以降のイスラエルの歴史は、礼拝することを忘れ、他の神々に走り、部族連合体から王政へと移り、その王国も南北に分裂し、それぞれが外国に滅ぼされるという歩みでした。ヨシュア記は、バビロン捕囚以後に編纂されたと考えられますので、24節の言葉は、過去の歴史を振り返り、自分たちイスラエルの集まりにおいて、最も大切な事柄が礼拝であることを、忘れないための記述と言えるでしょう。

さて、本日の使徒書は、前回の続きですが、新共同訳でも聖書協会共同訳でも「妻と夫」と小見出しが付いています。結婚について述べている個所です。現在の祈禱書でも結婚式の式文の使徒書の個所として指定されているところです。現在の視点では『聖書』の中でも様々な疑問点が指摘される個所です。

エフェソ書のこの個所とヨシュア記との共通点とは何かというと、契約という概念が関わっていることです。ヨシュア記は、『聖書』における信仰が、漠然と心に思うこと、あるいは自分の願いを神様に委ねることなど心の動作ではなく、主なる神様に対するいわば忠誠心であることを示します。つまり信仰とは、主なる神様に忠誠を尽くすという契約を生きることなのです。ただし、その契約の主導権は、イスラエルに関しては主なる神様にあります。イスラエルが主なる神様を選んだ民であるからです。その契約を確認するのが礼拝です。つまり礼拝を軽んじることは、主なる神様との契約を軽んじることなのです。

エフェソ書が示す事柄も、結婚も契約だということです。結婚が契約とは、なんとも事務的で世俗的な感じがします。しかし、『聖書』が示しているのはそうではありません。二人の人間が決断して行う結婚という行為にも、主なる神様に関わるということです。言い換えれば、結婚とは、主なる神様が定めた契約の中で二人が生きることなのです。教会が結婚を尊ぶ理由です。

イスラエルという人間の集団における事柄であれ、結婚という二人の人間における事柄であれ、主なる神様はその歩みに関わっている、そのことを忘れな

いことが大切なのです。その中でわたしたちは人間の思いを超えた恵みを与えられ、いつでも希望を持つことができるからです。

さて、ヨハネ福音書は、8月の間に連続して学んでいた、長いお話の結びの部分です。「弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。『これはひどい話だ。誰が、こんなことを聞いていられようか。』」（ヨハネ6：60）とある通り、「私の肉を食べ、わたしの血を飲む」というイエス様の言葉を聞いて、弟子たちの多くがその言葉を受け入れることを拒否し、また「このために、弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった」（ヨハネ6：66）とある通り、一緒にはもう歩めないと立ち去ります。そして、十二人が残ります。

この部分は、最初はたくさんいたと思われたイエス様の弟子たちが、なぜ最後には十二人になってしまったのかという問いに対して、一つの答えを出しているといえます。しかし、主題はそこではありません。主題は、イエス様の問いに対するシモン・ペテの答え、「主よ、私たちは誰のところへ行きましょう。永遠の命の言葉を持っておられるのは、あなたです。あなたこそ神の聖者であると、私たちは信じ、また知っています」を今もこれからも保持することが大切だということです。また、その大切さを知っていたと思われる、残った十二人であっても、一人はサタンによって人間の思い、あるいはそれ以上に悪い事柄を行ってしまうことをも示しています。

本日の旧約日課と使徒書が示す事柄は、人間の決断によってなされる行為であっても、そこに主なる神様が関わって、それをいつでも意識することの大切さを示しています。それは一言と言え、信仰の歩み、あるいは契約の歩みと言えませんが、その歩みの中でわたしたちはいつも希望を与えられ、道を示されます。そして、福音書は、人の子の肉を食べその地を飲むという表現が、人間の常識では受け入れられないことであり、その当然のような理性的な判断が、イエス様から人間を引き離してしまう場合があることを示します。その中で大切なのは、イエス様にこそ希望があると信じることです。そのように信じたとしても、サタンに惑わされ、イエス様を敵対者に引き渡すようなことも起こると、ヨハネ福音書の物語は示しています。しかし、さらにイエス様の出来事が大切なのは、そのような間違い、サタンによって惑わされた行為であっても、イエス様の十字架の死と復活が、すべての人間に対して、まことの希望を示す、救いの出来事となったということです。

今、世界で起きていること、これから起きるかもしれないこと、それらを考えると、わたしたちはなかなか希望を持ってません。ことに主なる神様を信じる人々による争いは、その失望を深めます。しかし、『聖書』は、人間が理性的に考えたうえでの歩みとは、そのような歩みを生むのだと示しています。単なる過ちの歩みや、正しく思えたが間違いであった歩みの連続なのです。しかし、そのような中でも、それらすべてを超えて、イエス様は十字架の死の先に復活の希望があることを示されています。そのことをいつも確認するのがわたしたちの礼拝です。イエス様の十字架と復活を通して、この世界のすべての失望の先には、必ず希望があることを、改めて信じていきたいと思えます。